弘前大学教育学部紀要　第117号：9～20（2017年３月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 117： 9 ～20（Mar. 2017）

逸脱する文学教材
－「男色」篇－

Deviant Educational Texts in Field of Literature : Homosexual

鈴木　愛理*・仁平　政人*・平井　吾門*・山田　史生*
Eri SUZUKI*・Masato NIHEI*・Amon HIRAI*・Fumio YAMADA*

要　旨

国語科で扱える「感性や情緒」、「ものの見方、感じ方、考え方」、「想像」、「心情」、「言語文化」には限度があり、広がりや深みが制限されてしまう。そこで、教科書に掲載することは不可能ではあるが人間の感情の本質に迫ることのできるテーマを扱った作品を示すことによって、教材発掘の一助としたい。今回は、「男色」を描いた作品として、現代文からは、山崎俊夫「夕化粧」、古文からは井原西鶴『男色大鑑』より「垣の中は松楓柳は腰付」、漢文からは『韓非子』からの一篇を提出する。

キーワード：国語科教育、現代文、古文、漢文

１．はじめに

国語科の「読むこと」では、「感性や情緒」、「ものの見方、感じ方、考え方」、「想像」、「心情」、「言語文化」について教育を行っている。しかしそれが学校教育である以上、限度があり、広がりや深みが制限されてしまうことは、いたしかたないことであろう。そこで、教科書に掲載することは不可能ではあるが人間の感情の本質に迫ることのできるテーマを扱った作品を示すことによって、教材発掘の一助としたい。今回は、「男色」を描いた作品として、現代文からは、山崎俊夫「夕化粧」、古文からは井原西鶴『男色大鑑』より「垣の中は松楓柳は腰付」、漢文からは『韓非子』からの一篇を提出する。（鈴木）

２．現代文　―山崎俊夫「夕化粧」（抄）―

【本文】

芍薬（しゃくやく）の根は凋（しを）れ罌粟（けし）の花も腐つて、夏の近づくにしたがひ、春はただ老いてゆくままに衰へた。

＊弘前大学教育学部国語教育講座
Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

[1] 鈴木愛理、仁平政人、平井吾門、山田史生「逸脱する文学教材－嫉妬篇－」（『弘前大学教育学部紀要』第114号、2015、pp.25～34）に詳述。

信夫（しのぶ）と市彌が黒い冠木門（かぶきもん）を出たのは、五月の末の或る暮れがたであつた。九段のせまい二合半坂（にがふはん）には、疲れて弛みきつたゆふ日が紫色を帯びて漂ふてゐた。細い夕月の影はほの白く。

「僕は家にゐるとまるで墓場にでもゐるやうな気がするよ。そこいらに墓標のやうな人達がうろうろ突立つてるんだぜ。」

信夫はかう言つて黒い門の方をふりむいて見た。

「でも信ちやんとこはいいやね、大勢なんだもの。あたいんとこなんかたつたふたりつきりだよ。」

市彌のものの言ひやうは、艶やかな調子の中に何とも言ひ知れぬ甘い淋しみがこもつてゐた。

「だつて市ちやんとこの小母さんは明るい顔してるぢやないか。」

「信ちやんにはさう見えるかい。をかしいねえ、あたいにはまたどうしてああ淋しい顔してるんだらうと思はれてしかたがないよ。ばかに蒼白いんだもの。」

「蒼白いところがいいんぢやないか。それにだいいち芸人なんだもの。」

「芸人なんてそんなに羨ましいもんだと思ふのかい信ちやん。」

「だつてさ、家の母さんなんか、つまらない紅茶の入れかたなんぞを知ってゐながら、三味線ひとつ弾（ひ）けないんだもの。何千円てする洋琴（ピアノ）を座敷のまんなかに飾つといたつて、あれが何になるんだらうと僕は思ふよ。」

「をかしいよ、信ちやんの言ふことはこのごろすつかり谷井さんの口調になつてしまつたね。」

ふたりは九段坂の下で電車に乗つた。

「何日か近いうちにまたふたりで谷井さんのところへ行かうね。」

「ああ行かうよ。」

やがて銀座でふたりが電車から降りた時は日もとつぷりと暮れて、白熱の電燈と華瓦斯とが舗石の上を照してこもごも光の領分を争ふてゐた。

「やっぱりあたい達には明るいところより、暗いところの方がいいんだね。」

ささやきあひつつ、ふたりの姿は銀座裏へとはひつて行つた。

「さうさ、君も僕も少年時代といふものを、まるで暗い道ばかり歩いて来たんだもの。」

「だけど信ちやんもあたいも何故女の子に生まれなかつたんだらうね。」

「どうして。」

「どうしてつてこともないけど、あたい達は女の子のやうにして暮してきたから。」

かう言って市彌は何か懐かしい思ひ出の影を追ふやうな瞳で、信夫のふつくらとした白い頬を見やつた。信夫はその言葉をきき咎めるやうに可愛い眼で市彌を睨めながら、

「女の子に生れちや何もならないぢやないか、僕等の生きてゐた甲斐がないぢやないか。」

「何故……。」

「そりや市ちやんにだってわかつてるぢやないか、女の子が女の子らしく暮したんぢやなんにもならない、あたりまへのことぢやないか。」

「あたい達は片輪なんだねえ、してみると。」

「君は片輪が厭なのかい。」

しつとりした銀座裏の背景は、ふたりの話を緯経に織りこみながら瞬間毎に変つて行く。やがてふたりの前に日吉町のほの暗い巷路が現はれた。

「市ちやんご覧、彼処へ土耳古帽を被つた人が行くよ。」

「詩人かなんかでなくちやああいふ帽子を被らないんだつてねえ。」

「ほら、ぷらんたむへはひつたよ。僕ああいふ人達を見ると何だか羨ましいやうな気がしてならないよ。」

「あたい詩人にやなりたいとは思はないね、詩人の身になるよりいつそ詩人に歌はれる身になりたいと思ふよ。」

かういつて市彌はまた癖のやうに、何を見るともなくうつとりと眼の前を凝視めてゐたが、やがて夢から醒めたやうに、

「信ちやん、あたいの顔も蒼白いかい。」

と言つて急に信夫の顔をまじまじと見守つた。

「ああ、憎らしいほど蒼白いよ。」

「さうだらうねえ、信ちやんの顔もそりやあ蒼白いよ。すこしぐらゐは紅味も残つてほしいねえ。」

「この顔色は僕等の過ぎてきた少年の日を語つてるのさ。」

「だけどいくつだと思ふえ、あたいはまだ十七なんだよこれでも、信ちやんだつてあたいよりひとつ多いつきりぢやないか。」

「そりやさうさ。だけど僕等はわづか十二か十三ぐらゐの時にもう、自分の肉体が自分の肉体ぢやなかつたんだからね。それから今までうかうかと夢のやうに……。」

「だけどあたい、ああいふ人達をちつとも恨めしいと思つたことがないよ。あたいは自分のしてきたことをちつとも悔んだり隠しだてしたりするわけがありやしないと思ふよ。だつてあたい達の指はほかの人達みたやうに、竹刀を握つたり鉄の棒にぶらさがったりするには、あんまり細すぎたもの。」

市彌は今更のやうに自分のしんなりした指を握つてみた。信夫は蒼白い頸に細いかひなを巻きながら、

「ああ、だけどもう来年の春は卒業だね。何だか中学を出るともうおとなになつてしまふやうな気がしてならないよ。」

「おとななんかになつちやほんとにつまらないやねえ。いつまでもあたい達のかういふ心持を持つてることが出来ないのかしら。あたい達がおとなになるつてのは、つまりもう死ぬやうなもんだと思ふよ。」

「死ぬやうなものさ。だから僕はかういふうつくしい夢を抱いたまま、だあれも見ないところで死んでしまひたいよ。」

「その時はあたいも連れてつておくれな、いつしよに。」

「ああ。」

「きつとだよ。」

ふたりの哀れな夢想者は、何時のまにか銀座を横ぎつて築地の方へ歩いてゐた。

「ぢや、あさつてまた口笛を吹いておくれよ。」

市彌は別れぎはにかういつて、信夫の手をかたく握りしめた。天鵞絨のやうな空の底には、緑色の星が瞳のやうに光つてゐた。

日いちにちと老いさらぼひて醜く衰へた春が追はれるとともに、初夏の新緑がさやさやと人の懐にひそみこむころとなつた。さすがに暗い淋しい芸人の家も、はつ夏の水色した空気に洗はれてすこしは明るくなつたものの、もとより因襲重き栖み家とて、築地の家は古びた提燈を張り更へもせず、やはりそのままつるしてゐた。さうして黒く光る格子戸を綺麗にみがくぐらゐが、せめてもの夏の音づれを見せてゐる。かへつて弟子達から時折に貰ふ果物の新しい篭などが、外の世界の夏をこの家の内へ齎した。

虫喰ひ汚附いた薄い稽古本の紙の匂ひ、仏壇の黒く煤けた扉の蔭に炷く線香の淡紫に黄ばむだ細い烟、樺色に懐んだ小袖箪笥の、歩く毎に気魂あるもののやうにたたたた……と鳴る金具の取手、市彌の生れた家はかくも暗かつた。市彌の母はかくも淋しい家の底にすわって、十幾年といふものを暮してきた、何も考へぬ傀儡のやうに。けれどもかうした家に生れたちひさい人形の生命は、夢のやうに不思議であつた。幻影のやうにうつくしかつた。人形の親達はこの可愛い裸人形を、きいきい泣かして舐つて痛いほど頬摩りしても尚飽足らなかった。毎年の夏祭に青黛を額にうつくしく画いた稚児姿は、町内の花のやうに歌はれたのである。

人の世の運命は流れて、母の手ひとつに育てられるやうになつたころから、人形のふつくらした皮膚のしたには、生きものの匂ひした血が流れ始めた。さうして気味の悪いほど豊麗な肌には、女郎蜘味の糸のやうなものがくるくると絡み附いて、その末端が人びとの心に執念くこん紮かつた。その糸に促拿まれた人びとの心は、いたく悩まされてわくわく震へた。かうしてほんの薄化粧したやうな艶やかな人形の蕾は、早くもむざむざとむしり採られて、無理耶理に人の温みで開かせられてしまつたのである。市彌は稚くして既に少年の悲哀のやるせなさを味はなければならなかつた。市彌の夜の外出が次第に多くなつて、一週間にいち度、十日にいつ遍、と外に宿つてくることもあるやうになつた。その子の秘密を知らぬ母は、ただそはそはしたものに襲はれるやうな市彌の素振を、痛く気にかけるばかりで、女親のはかなさに、どうしてこれをその子に糾明さうかといふ考へさへつかなかつた。絶えず市彌に宛ててくる手紙の差出人の名も、長いのはいち年、短いのも半年ぐらゐで変つて行つた。その差出人の名の更つて行く毎に、市彌のうつくしい命も縮められて行くのだといふことは、市彌自身ですらも気が付かなかつた。勿論母はそれを知らう筈がなく、ただ日に日にくる手紙の数の多いことを不審るに過ぎなかつた。

「君の肌はばかにまつちろいね、まるで女みたやうに。」

と言はれると何時でも、

「ああ、あたいのお父さんは肺病で死んだんだもの、もしかするとあたいも肺病だよ。」

かう言つた市彌は、肺病といふものを世にもうつくしいものの象徴のやうに思つてゐたからで、それがこの手紙の差出人の名の更つて行く原因になるのだとは、夢にも想はなかつた。そこにもうつくしいもののの矛盾がひそんでゐる。

少年の肌は春に逢ふ毎に精緻なはたらきを増して、つひに微妙な特殊の触感を覚えるやうになつた。声彩に拠つてその人の肉体の肌ざはりを予知し、またその皮膚の触味に拠つて、その人の微細な情趣をよみわけることが出来た。さうしてその触感が不思議にもたいていの場合に間違ひのないことを慥めて、心ひそかに快楽とした。けれどもこのいたいたしい異常な経験が、かういふ微妙な触感を能へる代りに、恐るべき致命の償ひを要求することがないであらうかなどといふ、理性の恐怖を抱くには市彌はあまりに殉情底な少年であった。

自然に背いた道をゆく、人の知らぬ世界に住む、人の歩かぬ陰の道を踏むといふことがこの弱者にとつてはたまらなく嬉しかつた。出来るだけの力を尽して、出来るだけの深い濃厚な経験を漁らうとするゆゑ、市彌の肌はますます爛熟してゆくに従つて、その微妙な異常な触感もまた痛いほど鋭敏くなつて行つた。散り悩む芍薬の花の蔭に、飽くまで春を貧つて精魂の尽き果てた鉄漿蝶が、疲労れきつて重たい翅を靠れるやうに投げ出して、酒のやうな濃い空気のなかに恍惚と見据ゑる緑の瞳、そこに市彌といふ妖童の姿が映つてゐる。また金泥のなかにまみれて沈む江戸紫のゆかしい祥雲寺、もしくは柿地に玉虫のこぼれ唐草浮紋も巧み極めた雁金屋、その襴絹のなかに市彌の蕩けるやうな魂がつつまれてゐる。すべてのはなやかなものを破壊する、時間の酷いことを嘆く必要も無からう。傷ましい痕跡を残してあらゆるうつくしいものを掠奪し去る、推移の早いことを呪ふ必要も無からう。過ぎゆく夢のつらなりが世の運命ならば、人はまづ過去の追憶の儚ない余滴に舌舐摩りをするにさきだつて、溢るる現在の酒盞を飲みほすに如くはない。遠き未来はただ銀髪の翁をして、因縁因果の伝説を編む夜伽の有明行燈たらしめよ。うつくしきものはかりそめの泪をす

ら愛惜(をし)むことを知らない。

ふとしたことから市彌がはからずも、自分とおなじやうな蔭の道を歩く信夫と親むやうになったのは、ついこの年のきさらぎのころであつた。

それは――ただある夜とばかり、わざと印象を壊すやうな説明は附足(つけた)すまい――どんよりと曇つたうす寒い夜であつた。浅草観音堂の裏で市彌はしよんぼりと人を待つてゐたが約束の六時の鐘が鳴つてもその人は来なかつた。不思議なことに市彌とおなじやうな年ごろの少年が、しきりに人待顔でやはり市彌の方を見てはけげんな顔をしてゐた。それが信夫であった。その夜ふたりの少年は待人に逢ふことの出来なかつた代りに、思ひがけぬ伴侶(つれ)を得て、かへつて互ひに歓んでおなじやうな身の上を語り合つた。ふたりはそれを機会(しほ)にその後、幾度かこの観音堂の裏で忍びやかに逢つた。逢ふ毎にふたりは肉身の親しみさへ覚えるやうになつた。

（中略）

梔子(くちなし)の花も逝(ゆ)いて、合歓(ねむ)の葉が眠るころとなつた。水浅黄(みづあさぎ)の闇を紺によごした薄くらがりの夏の暮靄(ぼあい)のなかに、浅草観音堂の裏の扉は夢のやうにしつとりと閉ぢられてゐる。夕ぐれ雲の漂ふあたり、疲れた空の銀の微明(びめい)。遠く何処ともなき茅蜩(ひぐらし)の顫へ声。

観音堂の欄干(てすり)に靠(もた)れたふたりの少年の揃ひ浴衣は、憎らしいほど派手であった。

「あの晩は白いみぞれがさらさら降つてたねえ。」

「君は其処の段々を幾度も昇つたりおりたりしてたぢやないか。」

「信ちやんも廊下のところを行つたり来たりしてたつけねえ。あたいはなのうちは気味が悪くつてしやうがなかったよ。」

「だけど最初に話しかけたのは君の方だぜ。」

「あたい信ちゃんがその時に着てた着物の柄(がら)までちやんと知つてるよ。どうしてもあたいにや信ちやんがお化粧してるんだとしか思へなかつたんだけど、でもさうぢやなかつたんだつてねえ。」

「そのくせ市ちやんこそしてたんだらう。」

「ああ、ほんの薄化粧さ。だつてあたいの顔はあんまり蒼白くつて、明るいところへなんか出ると恥かしいくらゐなんだもの。」

「寒かつたねえあの晩は。」

「今夜も宮戸へ行かうよ、あの晩みたよに。」

ふたりは欄干(てすり)を離れて階段をおりた。

「あたい達があの晩遭はなかったら、きっとお互ひにあかの他人だつたのかもわかんないねえ。」

「さうさ、さうして僕等はお互ひにおなじやうな身の秘密を持つてゐながら、それを打明けることもできないで、そのまま青い毒を抱いて死んで行つたんだらうよ。」

「信ちやん、青い毒ってなあに。」

「僕等は青い毒を抱いてるんだつてさ、谷井(やつゐ)さんがさう言ったよ。市ちやんはあの話をまだきかなかつたのかい。」

「だつてあれつきり逢はないんだもの。ああわかつたそのことかい、信ちやんがこなひだから大事な話がある、あるつてさういつてたな。」

「ああ、さうなんだよ。」

「ぢや早くお言ひよ。」

「いまなかへはひつてから言ふよ。」

「芝居なんか見るなよさう、暑苦しいんだもの。それよりや早くなんだかそれを言つておしまいな。」

「驚いちやいけないよ。」

「なんだい、そんなに人を焦慮(じら)してさ。」

ふたりは宮戸座のたちならんだ幟(のぼり)の側を通りぬけて、聖天横町(しょうでん)の方へ足を向けた。

「うつくしいものの早く廃れ、愛せらるるものの早く亡ぶるといふことは、何たる残酷な矛盾であらう。しかしこの残酷があるために、かへつて愛惜といふ慕はしき文字も生れた。すべてうつくしきものはそのうつくしさを全うせんがために、余韻嫋々(でうでう)の哀曲を残して去つた。あなたは一生をうつくしい人として終りたいとは思ひませんか――てかういふのがまづ谷井さんの前置なんだよ。何を言ひ出すのかと思つて僕弱つちやつたけど、黙つて聞いてたのさ。――あなたは自分の生命(いのち)をうつくしいと思つたことがありますか。さうしてあなたはそのうつくしい生命の後に、愛惜といふ落胤を残したいとは思ひませんか。なんてそんなことをいくつもいくつも重ねてきくんだよ。だからね僕かう言つたのさ。わたしはただ人に可愛がられてさへ居ればそれでいいんですつて。」

「あたいだつてきつとさういふよ。でそれからどう言つたの。」

「したらね、――ああ可哀さうにあなたは今まで、どういふわけで可愛がられてゐたかといふことすら自分で考へたことがなかつたんだ。あなたは自分の肉体に持つてるひとつの不思議な因縁を自分で知らなかつたのです。それを知りたいとは思ひませんか、つてまたきくんだよ。だから、そりや知りたいと思ひますつて言つたのさ。誰だつてさう言はれてみればききたく

なるのはあたりまへなんだもの。するとね、――それを今わたしがここで言つてしまふのは造作もないことです。ただそれをきかせられて、あなたが黙つてゐられなくなりはしまいかとそれを恐れます。きつとわたしを偶像破壊者だとかなんとか言つて罵るに違ひありません。しかしわたしは決してあなたの偶像を破壊するんではないのです。むしろその偶像を造つてあげるやうなものです。」

「もつと手短に言つてしまへないのかい。なんだか気がせいてゆつくりきいてる気がしなくなつちやうよ。青い毒の話はどうしたのさ。」

「だつて話は順にしてかなくつちやわからないんぢやないか。今ぢきにそこへ行くんだからまあきいといでよ。でね――あなたがたの生命は……。」

「あなたがたつて言つたかい。」

「僕や市ちやんのことを言つてるらしいんだよ。――あなたがたの生命は丁度あの螢のやうなものです。銀色の光を黒い闇の中に投げながら、水を慕つて飛んで行く夢のやうな生命。いやむしろあれよりももつと儚ないと言ひませうか。あのちひさい虫にとつては、ひと夏といふものは決して短い生命ではありません。光るといふことをおのれの生命の第一義だと観じてゐる彼等は、その死の瞬間に於てすらもなほ、消耗し竭した精魂を絞つてその銀色の光を亡すまいとする哀れさ。あなたがたもこれとおなじ運命をまぬがれますまい。いやその運命はもう何時のまにか、あなたがたの背後へ追ひ迫つて来てゐるのです。」

「だつてあたい達は何時死ぬか、そんなことがわかるもんかね。」

「だから僕もさういつてみたのさ。するとね、――いいえ、あなたがたは肉体のなかに青い毒を抱いてるんですつて。」

「青い毒。」

「つまりね、かういふわけなんだよ。僕や市ちやんみたやうなね、人に言はれない素性を持つたものは……。」

「人に言はれない素性つてなにさ。やだよそんなまはりつくどいことばかり言つて。」

「だつて僕等の歩いてきた道は明るいただしい道ぢやない、いはば陰の道なんだらう。だからやつぱり人に言へない素性ぢやないか。」

「それがどうしたの。」

「さういふ素性のものは、みんな若いうちに死んでしまふのがおきまりなんだとさ。こればかりは昔からずつとはづれたためしをきかないつて。」

「何故若いうちに死ぬんだらうねえ。」

「そりや脳膜炎つていふ病気になつて。」

「脳膜炎。」

「うそだと思ふんなら医者にきいてごらん、て谷井さんが言ふんだけど、まさかきけやしないからね、こればつかりは。」

「ぢや、あれかね、脳膜炎ていふ病気はきっと死ぬ病気なのかね。」

「死ぬとは限らない。だけど死なないにしても癒つたところで不具になる。風癲か、白痴か、馬鹿か、狂人か。」

「そんな恐ろしい……。で、むかふの人もやつぱりそんな恐ろしい脳膜炎とかになるの。」

「ううん、むかふはなんにも関係がないんだよ。こつちだけさ。」

「ぢやずいぶんつまらないやねえ。だけど何時その病気になるかわかりやしないもの。」

「だから、何時なるかわかんないから、明日なるかも知れない。今日なるかも知れない。たいがい早くつて十八九か二十前後、おそくとも二十三四までにはきつとならなきやならない。二十五にもなるまでまんぞくでゐられる人は、ほとんどないと言つてもいいくらゐだつて谷井さんが言ふんだぜ。」

ふたりの間に肉の疼くやうなわくわくした、堪へられない沈黙がつづいた。暗い町がつきて今戸の渡し場が、ふたりの少年の襟首に冷い川風を沁みこませた。

水の上へ出ると眠つたやうな川霜のなかを、赤い灯がちらりちらりと縫つてゆく。水の音はなくて静な船腹は滑るやうについついと過ぎてゆく。眠たげな船唄。水を切る櫓の音。すべてはただ蒼茫の夢の裡に溶けこんでしまふ。

ふたりは対岸に着くまでひと言もいはなかつた。黙つて水縁を凝視めてゐた。やがて船からあがつてもふたりは黙つたまま、並んで土堤の上を歩きだした。一町ばかりくると信夫は急に足を留めて樹の下へ蹲んでしまつた。市彌はその側へ寄り添つて、

「ねえ信ちやん、あたい達の肉体は腐つてるんだね。」

その声はさびしく沈んでゐた。

「さうさ、腐らされてしまつたのさ。この肉体のなかにはいろんな人のいろんな悪い血が凝結つてるんだもの。」

信夫は懐手したままじつと吸ひ入れられるやうに、川端の水面に見入つてゐる。

「あたいはよく今までこの肌が爛れて潰れて臭い膿

が出てこなかつたと恩ふよ。」

「僕の血はどんなに濁つてるだらうね。」

かう言って信夫は不意に懐から白鞘の短刀をとりだした。市彌はそれを凄いやうな眼で睨みながら、

「信ちやん、それをどうするの。」

と奪ふやうに信夫の手からとりあげて、抱くやうに胸にかかへた。

「僕は谷井さんにあの話をきかされた日、すぐ家へ帰つて刀箪笥のなかからその短刀を偸(ぬす)んどいたんだよ。それから今までしよつちゆう懐へ入れて歩いてたんだぜ。」

市彌は鞘をすこしばかり明けて、その白い刃にしげしげ見惚(みほ)れてゐたが、かちりと閉めて信夫の手へ渡しながら、

「いいもの偸(ぬす)んだねえ。あたいをおいてきぼりにしちやいやだよ。」

信夫は黙って首肯(うなづ)きながら、市彌と顔を見合せて莞爾(につこり)と笑つた。

【解説】

山崎俊夫（1891～1979）は、大正期に雑誌『三田文学』を中心として活動した作家である。小説家としての活動期間の短さ（1920年に役者に転身し、以降執筆から遠ざかる）もあり、文学史的にはほとんど光を当てられないマイナー作家であるが、「美少年」を中心的なモチーフとしたその耽美的な文学世界は、熱心な支持者を持ち続けている。小説「夕化粧」（『三田文学』大正２年１月号）は、山崎の実質的なデビュー作である。本稿ではその中盤部を、中略を交えて採録した。本文は『山崎俊夫作品集 第一巻 美童』（奢壩都館、1988年）に基づく。

あらすじは以下の通り。主人公の美少年・市彌は早くに父を亡くし、三味線の師匠をする母と暮らしている。彼は「十二か十三ぐらゐの時」から、年上の男たちに迫られ、関係を結んできた。ある時彼は、自分と同じように男たちに愛されてきた美少年・信夫と出会い、親しく付き合うようになる。市井という男から、自分たちのような生き方をしている者は若くして死ぬ運命だと教えられた二人は、自分たちの抱えた負性を強く意識する。少しのあいだ離れた後、再会した二人は心中を遂げる。

近代以前の日本に広く男色の文化が存在していたことはよく知られており、明治・大正期にあっても、「美少年」は周囲から注目・羨望されるともに、性的被害の対象ともなりうる存在であったとされる。山崎の描く女性的・両性具有的な「美少年」像は、こうした近代以前からの男色文化の文脈を引き継いでいる。だが、山崎の文学を特徴づけているのは、男色そのものは背景にとどめ、「美少年」たちの内面のあり方にこそ焦点を合わせているという点である。簡略にまとめれば、本作に描かれるのは、「女の子のやう」に男たちの欲望の対象とされてきた自身の生き方を「陰の道」と捉えつつ、そこに誇りと快楽をおぼえる少年たちの姿だ（例えば本文の中略個所で、市彌と信夫は、揃いの浴衣と帯で「往きかふ人の羨望を擅(ほしいまゝ)にしながら、睦しさうに手をとりあつて歩く」ことを楽しむ）。この点で、市彌と信夫との関係は「男色」的というより、自らの似姿と睦みあうようなナルシシズム性を帯びていると見られよう。こうした本作の「少年」表象に、高原英理氏は「「強くあろうとすること」だけを求める上昇意識と主体性志向への批判・反発」、「弱くあることの権利」の提示を見出している（高原、2003）が、卓見と言えるだろう――それが他者の言葉により、容易に反転してしまう脆さ・危うさを帯びたものであるとしても。

ところで興味深いのは、本作では、市彌の「うつくしさ」が強調されつつも、彼の容貌は具体的には描かれず、むしろ「夢のやうな甘い濃い香」など、主に「匂い」という形でその魅力が語られていることである。それは、多くの場面が「光の領分」から離れた夕方～夜の空間を舞台としていることと関わるとともに、けだるさや疲労のような身体性を含意するレトリック、また腐敗・衰滅のイメージの多用を通して世界を描き出す本作の表現の様態とも、ゆるやかに結びついているように見られる。一般に近代の社会が視覚中心主義的であるとされることを踏まえるなら、こうした本作のありようは、近代の支配的な価値観に背を向け、「夢の代の往古より土蔵の奥深く秘蔵されし古き酒甕」（作品集『童貞』序）のような表現世界を志向した山崎文学の方向性を、鮮やかに示していると考えることができよう。本作の魅惑の核心もまた、ここに位置づけられるように思われる。

なお、本文には今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句・表現が見られるが、作品の時代的背景および文学的価値とに鑑み、そのままとした。（仁平）

３．古文　―井原西鶴『男色大鑑』より「垣(かき)の中(うち)は松(まつ)楓(かへでやなぎ)　柳(こしつき)は腰付」―

【原文】

世界一切の男美人なり。女に美人稀なりと。安倍の晴明が伝へし。子細は女の面は。白粉に埋むのみ。唇に紅花歯を染なし。額を作り眉の置墨。自然の形にはあらず。ひとつは衣装好に人を誑かす事ぞかし。絹帷子の袖涼しき。風の森近き里に身を隠し。生国の大隅にも長浪人は住うし。栄花はむかしになりぬ。橘十左衛門とて武道すぐれての男。古主にも借みたまへども。家老職の者との口論。是非なく城下は闇に立のき。時節の朝日を待ぬ。女は山城の国栗栖の小野の奥そだちなりしが。年久しく一条村雲の御所に宮づかひして。親里の碓の音も。今は玉琴に聞替。同し油火も松明進むると云なし。賤の家の糠味噌迄も。酒塵と言葉を改め。物毎やさしくよきを見習ひ。風義もそれにつれて。都皃になりぬ。十左衛門世にある時この御所に筋目あつて。此女廿二の冬。はじめての冢の日乞請。夫妻にして。此中に一子常ならぬ生れつき。母自慢もまことにうるはしく。名をさへ玉之助とて。今は十五歳になりぬ。面向不背の髪の結振。龍宮よりの見入も有べし。此美形の田舎には惜やと。見る人の申せし。今の東武に身躰望を懸。家ひさしき若党金沢角兵衛積年五十にあまれば。物のさばき慥なるもの付て。旅はじめの曙いそぐに。名残の姿を見送り。かまへて武士の心懸は。命をおしむ事なかれと。此一言より外はなし。母親は角兵衛が近くによりて。しばらく囁き別れさまに。中にも其事をよと仰られける。つきづきの者ども何の事かとおもふに。玉之助角兵衛をまねき。只今母人申されしは。我に執心の人頼むとも。文なとの媒つかふまつるなと仰けるか。誰人にてもこがれての状たまはるを。蟠りて届けずば汝恋しらすなり。我たまたま人界に生をうけて。然も又世に悪まれぬ程の形にして。其情しらぬも口惜し。大唐の幽信が揚州にて。無情少年と。宗玢に作られしも。強顔心からなりと語りたまへば。角兵衛も分別して。いづれおふくろ様のやうに御気づかひあそはしては。浮世に若道は絶申べしと。大笑ひして行に。夏海の静に室津よりあがりて。須磨の関といふも恋せばつらかるべし。相坂の関と聞も忍ぶ身ならはと思ひやられ。勧修寺のあたりより北を見渡し。母の古里もあの山陰ぞかし。今は所縁の人もなくて問はずうち過。梅の木の茶屋とて。和中散の売薬あり。汗をしのぐ冷水うれしく。江戸より御迎の男爰に出合て。御奉公のあらましを申せば。心よくて水無月はじめつかたにつきて。間もなく御目見済て。会津に御供申てくだりぬ。心さし人に越おのづと御前よろしく。国中にありし少人の花は。皆入日の朝皃となりぬ。或暮風絶て。鞠垣の柳楓もうごかず。岩倉主水。山田勝七。横井隼人。玉之助いづれも色ある蹴出し。御前の御機嫌此時とまるべき所。玉之助手前にて落る事度々なり。日頃は家中一番の上手。飛鳥井の家にも生るべき人と。沙汰いたせしにと見るうちに。俄に眼ざし替り。身にふるひ手足青ざめて。装束ぬぎもあへず。沓音絶て。はや息の通ひもなかり。をのをのおどろき水いそぎ薬をあたへ。正気の時屋敷に送りて。色々医術をつくし給へども更に甲斐なく。次第に浮世の事極りぬ。此一人のなげきに世間の鳴をやめける。爰に笹村千左衛門と申て。御領境の御番所あづかりて。御城下の人は見しらぬ程の。すゑの役人なりしが。玉之助をあこがれ明暮おもふに便なく。いつぞは書通に心を御しらせ申べしと。おもひ込しうちにかかる仕合。御命にさはる事あらば。中々世には住むまじく思ひ定め。玉之助玄関迄。諸人の見舞と同しう帳に付て帰り。又昼機嫌をうかがひ。夜に入て御気色を尋ね日に三度づつ半年あまり勤めけるに。あやうき露命まぬかれ。塵汚を濯ぎ。肌をあらため。御前の御礼をはじめて仕舞。年寄中残らずまはりて私宅にかへり。角兵衛に見舞帳を取よせ内見するに。笹村干左衛門と申書付。病気そもそもより此かた。毎日三度つつの見舞。是はいかなる御人ぞとたつね給へ共。誰が存知たる者もなし。御家に筋目もあつて御入候やうに。いづれも存候は。御気分の御事しみしみと様子をたづね。よきと申せはよろこび。あしきと語れば忽に眼色かはり。常の人とは各別のなげき。相見へ申のよし御物語申せば。いまだ近付にさへならぬ先に。頼母子き御かたと斗云やみて。千左衛門屋敷ははるかなる所尋ね。此程の御礼に御門前迄と申入れば。かけ出是は有難き仕合。かかる野末迄の御初足。またもや袖風の。尾花もさはかしき此夕。只御帰宅と申せば。世は稲妻の暮またず。消る身のかさねては待れじ。すこし御咄申事心にやるせもなし。先それへと書院に通り。二人より外には松ちかき端居して。我等が胸の中あくる所は爰なり。此程の御心づかひ思ひ合に。近頃率爾ながら。数ならねども我に。若も御執心あらばけふより身をまかせんために。忍びて是にと語る。千左衛門赤面の泪折ふしの紅葉に時雨あらそひ。後は下心のあらはれ。菟角言葉では申がたし。正八幡の内殿に。所存を込置の由申せば。すくに参詣して。神主右京に子細をきけば。御病のためとて日参。願状の箱納め置れけると申。それをと開き見るに。貞宗の守脇指に一通筆を尽し。玉之助身の上をいのる。さては

不定の命。此願力にてのがれける。いよいよ見捨がたくと。念友するにはやもれ聞えて。御仕置の役人改めて。両方一度に閉門。はじめより死身に定めければ。更になげかず。かかる時の便とて。状文の通ひも。片陰に忍び道を付て。年月あまりかくありしが。今は世にあき果申せば。三月九日に切腹仰せ付られ候はは。有難かるべしとの訴状さしあげ。其日を待けるに。横目まいつて御意申渡して。何の事もなく。元服を仰せ付られ。千左衛門も別の事なく御ゆるされける。此上はと互に申合せて。二十五歳になる迄は。向後音信不通とかため。兒見合せても詞も懸ず。此御恩をわすれず御奉公を勤めけると也

【現代語訳】

「男はみんな美しいけど、女の美人はめったにいない」と安倍晴明が言っている。なぜならば、女は顔を真っ白に塗りたくり、口紅をべっとり付けて、歯を真っ黒に染めて（今なら過度のホワイトニングかな）、髪の生え際や眉毛に墨を付けて形を整えて、極めて人工的に美を演出するからである。そしてさらに、巧みに着飾ることで男性を誑かすものなのだから。

さて、薄着の袖が涼しく感じられるという鹿児島県は風の森の近くに、橘十左衛門という武道に優れた浪人がこっそり暮らしていた。風の森の橘。かつてはけっこうイケていたらしいが、それも今は昔。殿様は残念がっていたけれど、家老と喧嘩して、再起をかけて夜逃げしてきたのだ。妻は京都郊外の生まれだが、宮仕えによって都会っ子の言葉遣いや立ち居振る舞いをゲットしていた。十左衛門がまだ仕官していたころ、京都での野暮用が縁となって、当時二十二歳の妻と夫婦になった。やがて、二人の間にめちゃくちゃ美しい男児が生まれた。母となった妻は鼻高々で自慢していたが、それを非難することも出来ないくらい美しかったのだ。名前は玉之助。今や十五歳になっており、完璧な美しさはそのまま。神隠しにあっても不思議ではないほどであり、人々は「こんな田舎においておくのは勿体無いなあ」と噂していた。

そこで両親は、玉之助を江戸に奉公させることにした。昔から家に仕えているしっかり者の金沢角兵衛五十歳をお伴につけて、旅立たせることになった。父は「命を惜しまずしっかりやれよ」と見送った。母は角兵衛に近付いて何かを囁いた後、「特にそのことを注意してくださいよ」と言いつけた。おつきの人たちが「なんのこっちゃ」と思っていると、玉之助は角兵衛を呼んで言った。「今お母さんが言ったのは、僕のことを好きになっちゃった男の人からのラブレターなんか取り次いではいけない、ということだろう。恋い焦がれてやっとの思いで出したラブレターを届けないなんて、人でなしのすることだよ。僕はたまたま人間に生まれて、たまたま人よりちょっと美形なのだから、そういう情け知らずにはなりたくないなあ。執心の男性にあまりにつれなくしていると、死後にすら罵られたりすることもあるらしいよ」。角兵衛も、そりゃそうだなと思うと、「どちらにしろお母さんの言うようなことを気にしてたら、この世に男色はなくなっちゃいますよ」と大笑いしながら出発した。

瀬戸内海を抜け、平穏な夏の海を渡って兵庫県から上陸する。須磨の関やら逢坂の関やら、恋をしていたらまた別の感慨を抱いたんだろうなあ、などと思いながら京都まで到着。勧修寺の辺りから北を見渡して、お母さんの故郷はあの山陰にあるんだよな、と思いつつ、親戚なんかも特にいないのでそのまま通り過ぎた。滋賀辺りの茶屋では、体力回復の薬を投入し、汗も引くような冷水を飲んで息を吹き返せたのも有り難いことだ。ちょうど江戸からお迎えの男がその茶屋に来ており、江戸勤めの概略を教えてくれたので一安心。六月初めに江戸へ到着すると、すぐに殿さまへのご挨拶も済んで、お伴として本国の会津に下っていった。玉之助は志も高く、おのずから殿様の覚えもめでたいものとなった。国中にいた美少年たちは、もはや夕方の朝顔のようにしおれた存在となってしまったのである。

或る夕暮、風がやんで蹴鞠に使う柳や楓の木も動かなくなった。そこでは、岩倉主水・山田勝七・横井隼人・玉之助という蹴鞠の上手な四人が殿様の前で競技を披露していた。皆惚れ惚れするような技の連続に、殿も夢見心地であったが、玉之助がちょくちょくミスするのが目立った。「普段は一番蹴鞠が上手くて、蹴鞠の家元を受け継ぐくらいの才能を見せているはずなんだけどなぁ」と不思議がっていると、見る見る玉之助の眼の色が失われ、身も震えて手足は青ざめ、衣装を脱ぐ暇もなく動きが止まるとそのまま気を失ってしまった。人々は大変びっくりして、大急ぎで水と薬を飲ませると、息を吹き返したので安きに送り届けた。そして様々な医術の限りを施してみたものの、全く体調は良くならず、目に見えて死期が迫ってきたのが分かった。玉之助一人の為に、世間は大いに嘆き悲しんだのである。

さてここに、笹村千左衛門という国境を守る末端の役人がいた。下っ端過ぎて城下では誰も知らないほど

の人物であったが、彼は玉之助に恋い焦がれており、朝から晩まで彼のことを想っていた。しかし、玉之助に繋がる特別なツテがあるわけでもなく、いつかはラブレターを出して思いを告げようなどと思い詰めているうちに、このような玉之助の不幸を知るに至ったのである。玉之助にもしものことがあったら自分も死のうと心に決めて、命がけのお見舞いが始まった。毎朝早くから、玉之助宅の玄関まで他の人々と同じようにお見舞いに来ては記帳をした。それだけではなく、昼にも様子を家人に尋ね、夜になったらまた容態を伺うというように、一日に三回のお見舞いを半年余りも続けたのである。

やがて玉之助は、危険な状態を脱して奇跡的な復活を遂げるに至る。病床にあった身の汚れを濯ぎ、髪をきれいに整えて、何よりもまずお殿様にお礼参りをした。そして、ご心配をおかけした重役の方々に残らずご挨拶を済ませて、ようやく帰宅した。角兵衛に見舞客の記帳したものを見せてもらうと、笹村千左衛門という名前が、病床に倒れて以来、一日に三度ずつ必ず見舞いに来ていたことが分かった。そこで「これはどなたか分かりますか」と尋ねてみるものの、家人は誰も知らなかった。「ご実家の関係者だろうとみんな思っていたんですよ。ご容態をしみじみと尋ねて、体調が良い日には喜びを顔に出し、悪いと聞けば心底ご心配なさって、他の人とは心配のレベルが段違いでしたよ」などと家人が言う。玉之助は「まだ会ったこともないのにすごい人だね」とだけ言うと、かなりの距離ではあったが、急いで千左衛門の家にまでやってきた。「回復のお礼に参りました」と伝えてもらうと、千左衛門が駆け出してきた。「ご丁寧にありがとうございます。病み上がりにこのような郊外までいらして大変恐縮です。ただ、夕風も強くなってきたことですので、早々にご帰宅ください」と言うので、玉之助は「私の命は、いつ何時、稲光のように一瞬で消えてしまうかも知れない。そうなる前に、少々モヤモヤが溜まっておりますので、中でお話しできればと思います」と言った。すぐに家の中に通され、二人っきりで縁側に座り込んだ。玉之助は言う。「あの、もしかして、大変失礼ですが、私のこと好きなんじゃないですか？　あんなに尽くしてくれて。もしそうなら、この体を好きにしてもらおうと思って、こっそりやって来たんです」。千左衛門は顔を真っ赤にして涙ぐんだ。それはまるで真っ赤な紅葉に時雨が降り注ぐかのよう。そして、本心を伝えるしかないという気持ちになってきた。「とても言葉では言えません。八幡様に本心を綴ったものが納めてあるんです」と言うので、玉之助は急いで参詣して、神主に詳細を伺ったところ、「回復祈願のために毎日参拝された上に、祈願を記したものを入れた箱も奉納されましたよ」と言う。「ぜひそれを見せてください」と頼んで出してもらい、開けて見てみると、名刀の脇差とともに、ひたすら玉之助の身を案じた書状が収められていた。

「なるほど、死の淵にあったのに回復できたのは、彼の御祈願のおかげなんだ。やっぱり彼に身を任せるほかない」と玉之助。晴れて二人は恋仲となった。しかし、そのことはあっという間にうわさが広がり、お役人にバレた。男色はご法度なのである。二人とも自宅に監禁されるに至ってしまった。とはいえ、もともと死ぬ覚悟で交際を始めたので、特に嘆くこともなく、こんなこともあろうかと予め構築していた秘密の通信手段を用いて、何か月もやり取りを続けていたのである。やがて二人は「もう生きていても仕方ないので、三月九日に切腹したいと思います。よろしくお願いします」と殿様に訴え出てみた。切腹の日を待っていると、お役人がやってきて、お殿様のご意向を伝えてきた。何と全くのおとがめなしであって、玉之助には元服するようにとのことであった。千左衛門も、特に何事もなく職務復帰を許されてしまった。二人はお殿様に深く感謝し、「こうなったらお殿様の為に」と二人で示し合わせて、玉之助が二十五歳になるまでは今後一切音信不通になろうと決めた。実際に、城下で顔を合わせることがあっても、二人は一切会話すらしない。お殿様から賜った御恩を忘れずに、ひたすら職務に邁進したということである。

【解説】

井原西鶴（1642-1693）は近世文学の中核を為し、高校で学ぶ文化史や文学史にも欠かせない人物である。『世間胸算用』（1692）などが大学入試に登場することもあり、西鶴の文章を授業に取り入れることはそれほど逸脱した行為ではない。しかし、西鶴作品のあらすじは国語便覧等々で目にする機会も多い反面、好色物を中心として、タイトルの段階で学校教材としては内容に踏み込み難い作品が多い。

一方、世俗的な興味としては、そのような西鶴の性愛描写に関心が集まることが多いようであり、古典作品の性愛描写を集めたアンソロジーでは『好色一代男』が常連のように取り上げられる。また、漫画を中心としたメディア展開も見られ、BL コミックとして生まれ変わった『男色大鑑』もまさに刊行されたばか

りである。このような性愛に注目した西鶴のメディア展開によって、学校現場における西鶴作品の扱い難さが固定観念として更に増大していくことは想像に難くない。「男色」や「好色」といったタイトルが強烈だからこそ BL コミックの企画が編集部で通るのであろうし、学校教材としてもタイトルの段階で対象から外されることになろう。もちろん古典作品における性愛描写は、現代的なタブーの働く場では描けないようなものが現れることも多い。しかし、本作ではそのようなものは期待できない。男性同士が肉体的に愛し合う姿は「念友する」という一言で済まされ、精神的な繋がりを核に話は進んでいく。タイトルに伴うイメージと本文の内容とのズレは教育現場でも再度注目すべきポイントであろう。

浮世草子『男色大鑑』は、その名の通り男色をテーマに据えた短編集であり、八巻四十話を収める。大きく前後半に分かれるが、女色に比べていかに男色が素晴らしいものであるかが随所で切々と説かれている。序文では、魅力的な女性を相手にすることは、「美児人のなき国の事欠け隠居の親仁の翫びのたぐひ」（美少年がいない国でのその場しのぎであり、隠居おやじの慰み者の類）だとすら述べる。本話でも、安倍晴明を引き合いにして、冒頭から強烈な女性批判を行っており、むしろ慇懃無礼であるかのような男色への礼賛ぶりが見られる。

上述の通り、男性同士の濃密な性愛を描くのではなく、敵討ちや怪奇を扱った波乱万丈・荒唐無稽なストーリーに男色を絡めていくというスタイルから成る。全体を通して、星新一のショートショートを読むような、爽やかな読後感と誰かと共有したくなるツッコミどころの絶妙なコンビネーションが感じられる秀作である。

本話は、第一巻の三話目に位置するものであり、病気で生死をさまよった男が、自分の為に誠心誠意のお見舞いを尽くした男に真の愛を感じて身を任せる箇所がクライマックスである。実直さにほだされると書いてしまえば簡単であるが、そこに至るまでの過程が（性愛描写の簡潔さに比べて）極めて精緻である。「もしかしたら私にご執心なのでは……？」と尋ねるに至ったその心情、国境を守る屈強な侍がそれを聞き赤面して涙する様子、そしてその返答の仕方、全てにおいて読者の感情移入を誘う。ただしそこには、純粋な個人対個人の感情のみならず、主君への忠義という現代とは異なる機軸も存する。現代においてもセクシャリティの秘匿とその暴露は時に社会的な大問題を引き起こすが、彼らにとっては文字通り生死をかけた愛なのであり、恋愛をかじった高校生が「分かる分かる！　超泣ける！」などと単純に理解できるようなシロモノではない。社会背景や心理描写を丹念に追うという文学解釈の基礎を尽くすことで、初めてその愛を追体験することになるのである。タイトル及びあらすじが突飛であるがゆえに、あらすじを理解して満足するといった浅い読書では到底探り得ない精神性は、まさに文学教材の真骨頂と言えよう。仮名遣いや語句語法も難解であり、応用段階の教材であることは疑いない。「何のために古典を学ぶのか？」という疑問を抱く生徒に対しても、「このようなものを、あらすじを取る以上に鑑賞するためである」と正々堂々述べることが出来よう。（平井）

４．漢文　―『韓非子』より―

【原文】

昔者弥子瑕有寵於衛君。衛国之法、窃駕君車者罪刖。弥子瑕母病。人間往夜告弥子。弥子矯駕君車以出。君聞而賢之曰、孝哉、為母之故、忘其刖罪。異日与君遊於果園。食桃而甘不尽、以其半啗君。君曰、愛我哉、忘其口味以啗寡人。及弥子色衰愛弛、得罪於君。君曰、是固嘗矯駕吾車、又嘗啗我以余桃。故弥子之行、未変於初也、而以前之所以見賢而後獲罪者、愛憎之変也。故有愛於主、則智当而加親、有憎於主、則智不当見罪而加疏。故諫説談論之士、不可不察愛憎之主而後説焉。

【書き下し文】

昔者、弥子瑕、衛の君に寵有り。衛国の法、窃かに君の車に駕する者は罪刖なり。弥子瑕の母病む。人間かに往きて夜弥子に告ぐ。弥子矯りて君の車に駕して以て出づ。君聞きて之を賢として曰く、孝なるかな、母の故の為に其の刖罪を忘る、と。異日、君と果園に遊ぶ。桃を食らいて甘しとして尽くさず、其の半ばを以て君に啗らわす。君曰く、我を愛するかな、其の口味を忘れて以て寡人に啗らわしむ、と。弥子の色衰え愛弛むに及び、罪を君に得る。君曰く、是れ固嘗て矯りて吾が車に駕し、又嘗て我に啗らわしむるに余桃を以てす、と。故に弥子の行は、未だ初めに変わらざるに、而も前の賢とせらるる所以を以てして後に罪を獲る者は、愛憎の変なり。故に主に愛有れば、則ち智当たりて親を加え、主に憎有れば、則ち智当たらず罪せられて疏を加う。故に諫説談論の士は、愛憎の主を察

して而る後に説かざるべからず。

【現代語訳】

弥子瑕はかつて衛君の寵愛を一身にこうむっていた。衛の国の法律では、無許可で君主の車に乗るものは足斬りの刑に処せられる。弥子瑕の母親が病気になった。こっそり夜中にやってきて弥子瑕にそれを知らせるものがあった。弥子瑕は君命だとウソをついて君主の車に無断で乗って見舞いにでかけた。衛君はそのことを聞くと、弥子瑕をホメていう「親孝行じゃないか、母親の病気のために足斬りの刑にあうかもしれぬことを忘れるとは」。

別の日、弥子瑕は衛君と果樹園を散策する。桃を食べたところ、たいそう旨かったので、それを食べ尽くさず、のこりの半分を衛君に食べさせる。衛君はいう「なんと余を愛してくれていることよ、かくも美味のものをガマンして余に食わせてくれるとは」。

やがて弥子瑕の容色がおとろえ、寵愛もうすれたころになって、衛君にとがめを受けることになった。衛君は憎々しげにいう「こやつは君命だといつわって勝手に余の車に乗りおった。また余に食いかけの桃を食わせおった」。

弥子瑕の行為はなんにも変わっていないのに、かつてホメられたことによって、あとでとがめられることになったのは、衛君の愛憎が変わったせいである。君主に愛されていれば、こちらの想いが君心にかなって、いよいよ親密になるが、君主に憎まれれば、こちらの想いは君心にかなわず、とがめられて、どんどん疎遠になる。したがって上のものに諫言しようとするものは、上のものに愛されているのか憎まれているのかを見極めたうえで口をきくようにすべきである。

【解説】

自分は相手にどうおもわれているか。それを察すべし。なんだかんだいって上のものは下のものの生殺与奪の権をにぎっている。その顔色をうかがい、よほど慎重に立ちまわらねば、たちまち首が危なくなる。

ここで「寵有り」というのは、目にかけて可愛がることだが、もちろん性愛の対象として可愛がるのである。いわゆる男色である。royalty の性向としては、当時にあっては格別のことではなかったらしい。

弥子瑕というイケメン、衛君の寵愛をほしいままにし、やりたい放題にやっていた。愛されているうちはそれでよい。愛によって成りあがったものは、愛が冷めるや否や、一転、どん底に落ちる。かつては愛されたふるまいによって、かえって憎まれる。弥子瑕の「ふるまい」は変わっていない。変わったのはその容貌である。こればっかりは如何ともしがたい。

法治主義の立場によれば、法は厳密に適用されるべきであり、例外はゆるされないはずだが、衛の国はそうではなかったということだろう。おまけに上のものは得てして移り気だから、あえて諫言しようとするものは、いったい愛されているのか憎まれているのか、油断なく見極めたうえで説かねばならん。とはいえ、愛憎の主はコロコロと変化するから厄介である。変わらないことを察しないと口もきけない。あるいは変わったらすぐに逃げ出せる用意をしておかねばならない。

話そのものは単純だから、よく「わかる」。だが、これが「わかる」っていうことは、表面的にはともかく、けっこう自覚的に、われわれは不信と打算との世界に住んでいるとおもっているという証拠じゃないだろうか。この手の話が「わかる」ってことは、こういうことは世間のザラに転がっていて、自分もそうおもっているということを、みずから告白しているようなもんである。

しかし、まあ、こういうのって世の中のありふれた真理なんだろうなあ。自分が相手にどうおもわれているかということに無神経だと、しばしば痛い目にあう。でも、なんだか面倒くさい。（山田）

５．おわりに

以上、「男色」をテーマとした作品を現代文・古文・漢文から１作品ずつ提案した。

愛は、人にとってなくてはならないものであり、そのかたちは実にさまざまである。その対象だけでなく、愛し方も多様であり、自由である。

国語教科書には「恋愛」について描いた作品は決して多くはない。高校の教科書であれば定番教材である森鷗外「舞姫」と夏目漱石「こころ」くらいだろう。国語科の授業で「恋愛」を学ぶわけではないのだから、それをいけないということはできない。また「教科書に男性が女性を愛する物語しか載っていない」ということが、それ以外の恋愛観を拒絶し、否定することになるとも思わない。しかし国語科では「文学」という種類のテクストを学ぶのだということを考えると、文学（芸術）において欠かせないテーマであるはずの「愛」について書かれた作品が少ないことは、いささかいびつであるとみることも可能ではある。「舞

姫」や「こころ」に描かれる愛のかたちだけでは、「愛」を描くものとしての「文学（の言葉）」を学ぶには足りないのではないだろうか。

そういう文脈で教材内容を考えるとき、それは「男性が女性を愛する物語」ではなくてもよいのではないだろうか。なぜなら、相手が異性であれ同性であれ、人に恋をし、人を愛するという点で、愛の本質が変わることはないと考えるからである。その本質が描かれているのであれば、同性愛だからという理由のみで教材から斥けるべきではない。

国語科の「読むこと」の領域では、何が書かれているかはもちろんだが、どのように書かれているのかの学習が中心となる。書かれ方の優れたものが教材に適しているのは言うまでもない。また、作品として魅力的なもの、人間にとって本質的なテーマを扱ったものであれば言うことなしである。同性との愛を描く作品を載せることは、異性との愛を相対化し、「愛における自由」や「多様な愛のかたち」を提示することにもつながるだろう。セクシャリティやジェンダーについてどのように語っていくのかという言葉を獲得させていく意味でも、教材における恋愛観の多様化はひとつの可能性をもっていると考える。（鈴木）

【参考文献】

・文部科学省『中学校学習指導要領解説　国語編』2008
・山崎俊夫『童貞』小川四方堂、1916
・『山崎俊夫作品集』全五巻、奢灞都館、1988～2002
・五味文彦・神田龍身・高田衛・小森陽一・渡辺守章「日本文学における男色」、『文学』第６巻第１号、1995
・白洲正子『両性具有の美』（『白洲正子全集』第14巻（新潮社、2002）所収）
・高原英理『無垢の力〈少年〉表象文学誌』講談社、2003
・佐伯順子『男の絆の比較文化史　桜と少年』岩波書店、2015
・加藤達彦「殉教者の精神 ― 山崎俊夫『童貞』に見るコンプレックス ―」、『東北文学の世界』第24号、2016

（2017. 1 . 11 受理）